

10年前に私はネパールに行った。七歳の少年が百円ライターとネパールのジュースを交換してくれと行った。私は「OK」といって交換した。そうしたら少年は私に時間があるかと尋ねた。それで私は何故かと言ったら、暇があったら私の村に遊びにきませんか、ここから70キロぐらいの田舎である。そこはお金もありません。私は日本人から日本語を習いたいのです。何故習いたいのと聞くと、ここは日本人の観光客が多い。日本語をしゃべると「グット・ビジネスが出来る」というのである。この会話は私より上手な英語である。日本では学校に行かぬ、病気で大騒ぎしている。教育がもっとも大切な7歳の子供が、すでにネパールでは英語をあやつり、自ら、また日本を勉強しようとしている。

この差は、いったい何を賞味するものか。そして、人間とは一体何なのか、ペタンチックに言えば人間は退屈からまぬがれる為のみに生きている。何の目的もなく、何のよろこびもない人々が、時間になったら学校へ追いやられ、興味も意味も判らぬままに大人の教師から何やらつめ込まれてゆく生活、のぞみもしないのにムチ打たれ教え込まれるもの、そしてまた、一生使用もしない外国語をつめ込まれる多くの少年・少女、まさに国家という名のもとに、教育という正義の名のもとに、誰も疑うことない牢獄での生活をしいられているのか。いわゆる先進国といわれている、それはまた国家に厚く保護されている国民の実態である。かかる教育を受けたものが外国、とくに後進国に行くことによって、文明病をバラマキ散らす。いまその病に全世界はウメキ苦しんでいる。そうでないかもしれない。そのことに私自身が一番目覚める時だ。まずは芸術の始源は、とは、私自身が目覚めるべきだということか。この嶋本先生の芸術、ネット・ワークから自覚させられ、いま1987年私は、私自身の虚像をぬぎ捨て、本当の自分自身に帰っていく季節だとわかった。

いま、私は嶋本先生によって、真の私に帰り、一つの花を咲かせようと、まずは私自身が、私のこの牢獄をぶちこわす芸術を始めたいと考え、喜びにうちふるえていることを皆さまに告げます。いまや太陽は昇ろうとしています。（以下、嶋本先生の資料です。）